

企業名： 京都銀行

レポート名： 統合報告書 2023

1. この会社が目指している将来の姿が理解できるか

まず、これまで京都銀行は「地域社会の繁栄に奉仕する」を経営理念として掲げ、地域の成長を牽引し、ともに未来を創造することを目指して、創立以来 80 年余り発展してきた。この理念を今後も引き継ぎながらも、近年の量的・質的金融緩和政策に続く、マイナス金利政策によって金利低下に拍車がかかり、預金貸出金中心の従来型ビジネスに変革が求められ、さらに人口減少に伴う地方経済の衰退、加速する少子高齢化、社会・環境問題への意識の高まり、コロナ禍を経た人々の行動変容など不可逆的な変化が進んでいるという、金融機関を取り巻く環境の中で、同社は金融を提供価値の一つとして捉える総合ソリューション業を目指す姿として選び、その第一歩として新・第 1 次中期経営計画「New Stage 2023」を策定し、提供価値としてグループ総合力の強化、コンサルティング強化、DX 推進をテーマに掲げた持株会社体制への移行を目指している。このように、現在の自社や業界の置かれている状況を分析し、地域社会や顧客のニーズに沿った経営を行うと共に明確な目指すべき姿やそのためのテーマを定めているため、環境変化に機動的かつ柔軟に対応できる持続可能なビジネスモデルを確立できていると言え、京都銀行が目指している将来の姿が理解しやすいと考えられ、すべてのステークホルダーに対する企業価値の向上に繋がっていると考えられる。

2. この会社の現在の競争優位性が理解できるか

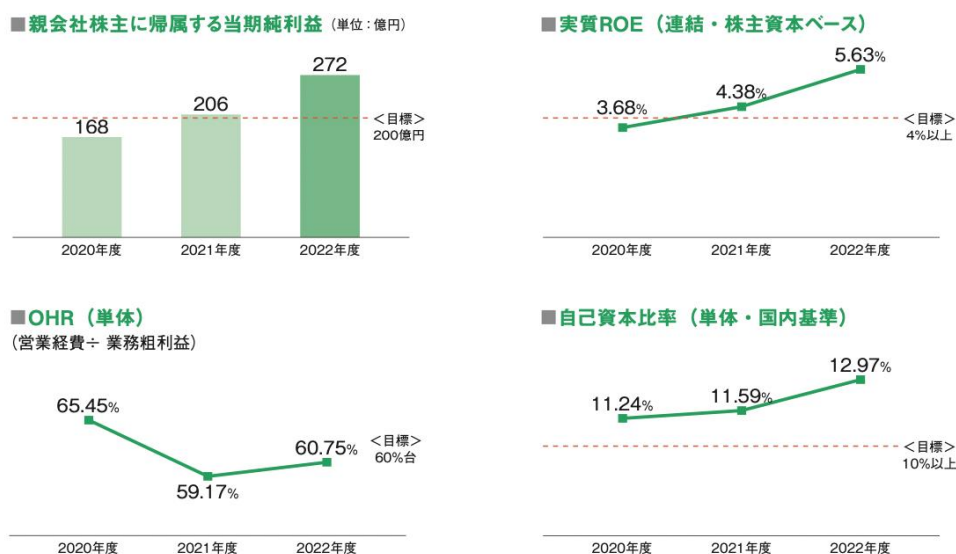
京都銀行は統合報告書 2023 内で自社の強みとして、創業成長支援機能及び強固な財務基盤、良質な人的資本、広域化戦略によって構築した広域マーケット・顧客基盤、多様なソリューション機能を挙げている。これらは地域社会に深く根付いた金融機関として持つべき要素でもあり、同社の企業価値を向上していくための重要な項目でもあるといえる。また、上に挙げた企業理念の高いレベルでの実現のため、同社はサステナビリティ経営の実践を進めており、地域全体の持続性向上に向けた取り組みを行なっている。同統合報告書内で取り上げられている例としては、日本茶の本場で長期滞在しながら茶業を学ぶことができる宿泊施設や滞在型観光を楽しめる古民家一棟貸宿泊施設があり、ともに地域全体の活性化につながるような取り組みとなっている。また、このような取り組みの引き続きの継続とともに、新たな成長・発展に向けた新・第 1 次中期経営計画「New Stage 2023」の存在も、京都銀行が同業他社との違いを生み出し、ステークホルダーに経営支援を受けるための重要な一因であると考えられる。このように、地域社会と結びつき、繁栄を支援し続ける金融機関として、京都銀行は営業エリア内で重要な存在となっていると考えることが可能で

あろう。

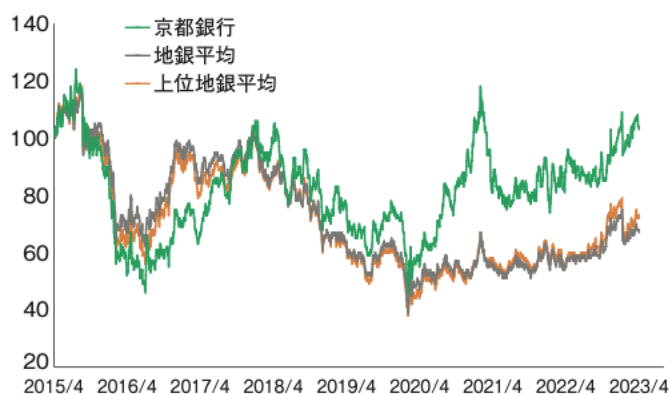
3. その競争優位性に持続性があるかどうか理解できるか

刻々と情勢の変化する環境下に晒されている金融機関は中長期的なビジネスプランの策定や経営計画の設定が困難であり、京都銀行においても、統合報告書内でも新・第1次中期経営計画「New Stage 2023」は2023年4月から2026年3月までの3年間の計画を明らかにしているだけで、今後10年、20年先におけるビジネスプランは明記されておらず、ゆえに同社の現在、また今後予測される短期的な競争優位性に持続性があるとは断定し難い。しかし、京都銀行は2022年3月期において、近畿地方内の数ある地方銀行の中でもトップの預金率を誇り、また当期純利益でも187.2億円で首位を占めており競合他社に対して優位であること、また成長モデルは外部の環境によって数年単位で変化してきながらも、軸となる経営理念は創立以来変えておらず、また今後も変更する見通しは見られないことから、これまでに引き続き安定した経営を行うと予測できるため、比較的現在の競争優位性に持続性があることが見込める。

4. この会社で自身の人的資本の価値向上を達成できると思うか



上図に挙げているのは2023年3月まで京都銀行において行われていた第7次中期経営計画の後に計上された主要財務指標である。図からも分かるように、掲げていた4つの項目の目標をすべて達成しており、同社の経営状況は比較的安定していると考えられる。



また上の図は京都銀行及び地銀平均、上位地銀平均の時価総額の推移を示したグラフである。このグラフからも分かるように、京都銀行の時価総額は上位地銀平均を大きく上回っており、ステークホルダーからの信頼を得ることが出来るような経営を行なっていることが分かる。これらの事実は、同社で勤務している従業員の日々の働きの成果であり、上述したように同社が挙げている強みである、良質な人的資本の存在を認識できる。そのため、京都銀行で勤めるとなった場合、私自身の人的資本の価値向上が見込まれると考えることが出来るだろう。

5. 報告書のよかった点はどこか、どのような改善余地があるか

同社の経営理念や目指す姿、またそれに向けたこれまでの経営計画の遷移や成果及びここからの計画の詳細やテーマを明確に、そして明快に記述しており、同社についてこの統合報告書を読むまでほとんど認識のしていなかった私でも理解できたため良かった。自社の経営状況を分かりやすく伝えるため、多くの財務指標を取り上げており、経営や経済の分野の知識を持った読み手ならば理解が深まるものであると考えられるため良いと思うが、やや説明不足でその指標が何を指しているのかが理解し難い部分も散見されたため、改善の余地があると考えられる。

参考文献

銀行ウォッチャーズ「関西の地方銀行8行による実力ランキング【2022年3月期】地銀上位・京都銀を追う関西みらいFG」

<https://bank-watchers.com/kansai-bank-2022/>

京都銀行 統合報告書 2023

<https://www.kyotobank.co.jp/investor/disc/index.html>